

バスを降りると、潮の匂いが鼻をくすぐった。

海のない土地に嫁いだから、この匂いとは縁がなかった。

何年振りだろうか。中学校を卒業するまで過ごした街に、久しぶりにやって来たのだ。

私は持っていた杖を、バス停の時刻表に立てかけると、鼻からゆっくりと、息を吸った。

懐かしい匂いに、頭の中の、当時の記憶がしまい込まれている場所が刺激される。

目の前には、海岸に向かって、ゆるい下り坂が伸びていた。杖を手にとると、私は一歩、坂を下り始めた。

建物の外壁はどこどころ剥がれ、屋根瓦も斜めに傾いている。でも、形は記憶の中のままだった。

ふと前を見ると、坂の途中に、制服姿の後ろ姿が見えた。

自信なさげに、肩を丸め、下を向いて歩いている。

——そうだった。いつもあんな歩き方だった。まるで、世界中の不幸を背負っているかのような、重い足取り。母が忙しい中、編んでくれた三つ編みのおさがが、どこか寂しそうに揺れている。

——あれは、十四歳の私だ。

懐かしさで、胸の奥が締め付けられる。こみ上げてくる感情を押し込めようとしても、潮の匂いと、波の音が、それを許さなかった。

私の意識は、一気に過去へと溶け込んでいった。

忘れもしない。六十年前の、あの日。私と幸子は、ここで出会ったのだ。